

解題

作詩質的

一卷

冢田 虎著

冢田虎、字は叔繇、通稱は多門、大峯と號す、信濃の人、父を旭嶺といふ、室鳩巢の門人なり、大峯初め父に學び、宋學を奉ぜしが、其後ち古今の書を研究し、經義に流派を分つの不可なるを論じ、經に依りて經を解するを可とすと稱し、復古學を唱へ、自ら諸經の解を作れり、天明元年、尾張侯の侍讀となる、文化八年、尾藩明倫堂督學に擢んでられたり、天保三年三月二十一日歿す、年八十八。

此書は詩を學ぶ者は、正道に據らざれば、假令佳趣妙想あるも、遂に邪徑に陥るの弊あり、之を射を學ぶに譬ふるに、質的を正して之を射るに非ざれば、巧手となる能はざるが如し、此書名づけて質的といふ、其命名によりて、その書の内容を推すべし、餘話には、和漢の詩を引き、或は批評し、或は解釋せる等、亦皆學者に益せざるはなし。

作詩質的序

家大人幼而好作詩，長而專務經學。歷年之間，唱闕里正風，以率後生。其著書之富，世之所與知也。而其所好之詩者，猶春秋不廢焉。其作之也，古人所謂三上，以爲其所。且其餘力，漢魏以下，元明以上，於其瑣言小說，亦善涉獵之。乃就其中，舉作詩之要語。平生以諭門人小子者，秀每在膝下而聞之。然秀也不肖，不能悉記臆之，亦未得如其諭。居恆深恥之矣。大人性殊惡暑，今茲三伏之節，以爲避暑之事，乃書其嘗平生所諭門人小子之語，而爲一冊子，以賜之。秀秀雖自不能服膺之，然欲與同志之士俱能記臆之，亦欲以貽後生。乃命之剖劂氏，蓋作詩者，師表不正，則雖有佳趣巧意，失于廢其言，譬之如習射者，雖有良弓直矢，質的不張，則不能發其筈，故題之曰作詩質。

的、云。

日本詩話叢書

文政三年庚辰秋八月穀旦

冢田秀

作詩質的

風雅之變、爲騷爲賦、乃至稱詩、而其成句、或短而至三言、或長而至九言、然五言七言、斯爲後世之通用、而五言則祖李陵蘇武、七言則祖栢梁臺、而後建安正始之體、及六朝之體、其時世之變、而風裁格調、雖或不同、都稱之古詩、至於李唐、乃王績、王勃、沈佺期、宋之問之輩、研察音韻、精練聲調、專主諷詠、而絕句與律、五言七言、其格調初定、斯謂之近體、然且有初盛中晚唐之異焉、趙宋以還、則偏

作詩質的

大峰先生述

男冢田 秀謹按

風雅の變、騷と爲り賦と爲り、乃ち詩と稱するに至る、而して其の成句、或は短くして而して三言に至り、或は長くして而して九言に至る、然れども、五言七言、斯れ後世の通用と爲りて、而して五言は、則ち李陵蘇武を祖とし、七言は、則ち栢梁臺を祖とす、而して後建安正始の體、及び六朝の體、其の時世の變にして、而して風裁格調、或は同じからずと雖ども、都て之れを古詩と稱す、李唐に至りて、乃ち王績、王勃、沈佺期、宋之問の輩、音韻を研察し、聲調を精練し、専ら諷詠を主とし、而して絶句と律と、五言七言、其の格調初めて定まる、斯に之れを近體と謂ふ、然して且つ初盛中晚唐の異有り、趙宋以還、則ち偏に唐人に原き、絶句と律と以て通體と爲る、而して或は初盛の風を好む者有り、或は中晚の風を好む者有り、乃ち其

原於唐人、絕句與律、以爲通體、而或有好初盛之風者焉、或有好中晚之風者焉、乃其所作之詩、各擬議於其所好焉耳、則非更可以目宋體明體也、但從宋至明、其風調之異、則亦因其時俗之變也、而不知者、更以爲宋元體、以爲明體、可謂誤矣、小子欲作詩者、先知斯時世風體之變、而可與言詩也已。

今世作詩者、竹馬紙鷲之時、聞二四不同、二六對等之言、而徒務協平仄、綴五字七字、以四句爲絕、以八句爲律、而未覺其所以爲律、爲絕句、雖知起承轉合之名、而未自得起承轉合之義、有中聯、則謂律、無焉、則謂絕耳、乃其所作之詩、意脈不屬、起結不整、首尾支離、而且風調卑屈、卒不成詩、然自以爲是矣、而

の作る所の詩、各其の好む所に擬議するのみなれば、則ち更に以て宋體明體と目すべきに非ざるなり、但だ宋より明に至りて、其の風調の異は、則ち亦其の時俗の變に因るなり、而るに知らざる者は、更に以て宋元體と爲し、以て明體と爲す、誤れりと謂ふべし、小子詩を作らむと欲する者は、先づ斯の時世風體の變を知りて、而して與に詩を言ふべきのみ。

今世詩を作る者、竹馬紙鷲の二四不同、二六對等の言を聞き、而して徒に平仄を協すことを務め、五字七字を綴り、四句を以て絶と爲し、八句を以て律と爲し、而して未だ其の律たり絶句たる所以を覺らず、起承轉合の名を知ると雖ども、而して未だ起承轉合の義を自得せず、中聯あれば則ち律と謂ひ、無ければ則ち絶と謂ふのみ、乃ち其の作る所の詩、意脈屬せず、起結整はず、首尾支離して而して且つ風調卑屈、卒に詩を成さず、然れども、自ら以て是と爲して、而して修練するを念はず、其の句を作ることを熟するに及びては、則ち奇字偉言以て青衿子

不念修練焉、及其熟乎作句也、則奇字偉言、以眩青衿子弟、斯之爲案、故雖終身好作詩、而使識者覽之、則未可以爲詩也、小子思之、唐司空圖示詩品二十四則、曰、雄渾、沖淡、纖穠、沈著、高古、典雅、洗煉、勁健、綺麗、自然、含蓄、豪放、精神、縝密、疎野、清奇、委曲、實境、悲慨、形容、超詣、飄逸、曠達、流動、此品則精則精、然恐失於煩碎、而作者或惑焉、其亦因作者氣稟、而且隨所題所感、乃其品自可以分也、宋嚴羽云、詩之法有五、曰體製、曰格力、曰氣象、曰興趣、曰音節、詩之品有九、曰高、曰古、曰深、曰遠、曰長、曰雄渾、曰飄逸、曰悲壯、曰凄婉、其用工有三、曰起結、曰句法、曰字眼、是亦可也、其用、工之三、作者最宜服膺焉也。

作詩質的

弟を眩することを斯れ案と爲す、故に終身好みて詩を作ると雖ども、而して識者をして之れを覺せしめば、則ち未だ以て詩と爲すべからざるなり、小子之れを思へ。

唐の司空圖詩品二十四則を示す、曰く雄渾、沖淡、纖穠、沈著、高古、典雅、洗煉、勁健、綺麗、自然、含蓄、豪放、精神、縝密、疎野、清奇、委曲、實境、悲慨、形容、超詣、飄逸、曠達、流動と、此品則精は則ち精なれども、然れども、恐くは煩碎に失し、而して作者或は惑はむ、其れ亦作者の氣稟に因り、而して且つ題する所感する所に隨ひて、乃ち其の品自ら以て分かるべきなり、宋の嚴羽云ふ、詩の法五あり、曰く體製、曰く格力、曰く氣象、曰く興趣、曰く音節、詩の品に九あり、曰く高、曰く古、曰く深、曰く遠、曰く長、曰く雄渾、曰く飄逸、曰く悲壯、曰く凄婉、其の工を用ふるに三あり、曰く起結、曰く句法、曰く字眼と、是れ亦奇なり、其の工を用ふるの三、作者最も宜しく服膺すべきなり。

詩者主諷詠、諷詠之調、古之詩者、在五音宮商之協焉、近體之詩、則在四聲之協焉、而我方作詩者、徒分字之平仄耳、而不得辨四聲、故雖巧作句、或聲調不協、將有不可以諷詠者、作者雖不能悉辨四聲、尤於入聲字、不可以不用心也。

明劉孟熙云、唐人詩、一家自有一家聲調、高下疾徐、皆合律呂、吟而釋之、令人有聞韶忘味之意、宋人詩、譬則村鼓、島笛、雜亂無倫、此孟熙之評、實知其可然也、蓋唐之盛也、則梨園伶人、及娼妓之類、亦歌當時作家之詩、故專練其聲調、宋人素法、效於唐、而雖陳其氣象、不主諷詠、好出新奇、而工詞意、囊讀楊萬里詩話、其所以爲佳詩、而摘舉焉者、唯奇字

詩は諷詠を主とす、諷詠の調、古の詩は、五音宮商の協ふに在り、近體の詩は、則ち四聲の協ふに在り、而して我方の詩を作る者、徒に字の平仄を分つのみ、而して四聲を辨することを得ず、故に巧に句を作ると雖へども、或は聲調協はず、將に以て諷詠すべからざる者あらむとす、作者悉く四聲を辨すること能はずと雖へども、尤も入聲に於て、以て心を用ひざるべからざるなり。

明の劉孟熙云ふ、唐人の詩は、一家自ら一家の聲調あり、高下疾徐、皆律呂に合ふ、吟じて而して之れを釋ぬるに、人をして韶を聞きて味を忘るゝの意あらしむ、宋人の詩は、譬へば、則ち村鼓、島笛、雜亂無倫しと、此の孟熙の評、實に其の然るべきを知るなり、蓋し唐の盛なるや、則梨園の伶人、及び娼妓の類も、亦當時作家の詩を歌ふ、故に専ら其の聲調を練る、宋人素と唐に法效し、而して其の氣象を陳ぶと雖へども、諷詠を主とせず、好みて新奇を出して、而して詞意を工にす、囊に楊萬里の詩話を讀むに、其の以て佳詩と爲し、而して摘舉する所の者、唯だ奇字、巧句、甚しきは、則ち談諧滑稽、皆古の以て詩と爲す所に非

巧句甚則詠諧滑稽皆非古之所以爲詩也、然亦非繁以爲然矣、宋人之詩亦或有髣髴乎唐者、不可以不擇也、渭城朝雨浥輕塵、客舍青青柳色新、勸君更盡一杯酒、西出陽關無故人、此王維詩、以今時作者視之、則淡泊平易、且何新奇之有、不可敢以爲秀絕也、然唐人以來、以爲絕調、或稱渭城曲、或稱陽關曲、乃爲三疊歌曲、相傳而不廢、斯詩之所以爲詩、亦可以知也、專尙其聲調爾、

人之作律、多先案中聯四句、而役於組織彫鏤、其意既盡於聯對、則起結四句、窮於無趣向、乃更設傳會首尾、不相應、遂失聯對之勢、而不成詩者、亦多有焉、故欲作律、則先案起結之趣向、質一二之句、而生前聯形容、後聯

作詩實

ざるなり、然れども、亦繁して以て然りと爲すに非ず、宋人の詩にも、亦或は唐に髣髴たる者あり、以て擇ばざるべからざるなり、渭城の朝雨、輕塵を浥す、客舍、青青、柳色新なり、君に勸む更に一杯の酒を盡せ、西陽關を出づれば故人無からむ、此れ王維の詩、今時の作者を以て之れを視ぶれば、則ち淡泊平易、且つ何の新奇か之れ有らむ、敢て以て秀絶と爲すべからざるなり、然れども、唐人以來、以て絶調と爲し、或は渭城の曲と稱し、或は陽關の曲と稱し、乃ち三疊の歌曲と爲し、相傳へて而して廢せず、斯れ詩の詩たる所以亦以つて知るべきなり、専ら其の聲調を尙ぶのみ、

人の律を作る、多く先づ中聯四句を案じ、而して組織彫鏤に役す、其の意既に聯對に盡くれば、則ち起結の四句、趣向無きに窮し、乃ち更に傳會を設け、首尾相應せず、遂に聯對の勢を失し、而して詩を成さざる者亦多く有り、故に律を作らむと欲すれば、則ち先づ起結の趣向を案じ、一二の句を質として、而して前聯の形容を生じ、後聯意を轉じ、以て其の句勢を易へ、七八の二句、意後聯より

轉意、以易其句勢、七八二句、意生自後聯、而相照於一二之句、可以固結其意也、明李東陽云、人但知律詩起結之難、而不知轉語之難、第五第七句、尤宜著力、是亦然矣、然未之盡也、今且思之、第五第六、後聯二句、宜同其力也、不可唯第五句也、第七第八、二句亦宜同其力、唯第七句著力、則不可固結也已。

五七言絕句、則平易起承之句、轉句轉意、以強其句勢、結句生自轉句、且相照於起承、可以結其意也、作者或多盡意於起承、而窮於轉結、則爲虎頭狗尾耳、然且五言與七言、其體裁不同、五言則多含蓄、七言則多流動、其亦翫味唐詩、而可以知也。

少年輩、或易絕句、而難律、未能得絕句之體、

生じ而して一二の句に相照し、以て其の意を固結すべきなり、明の李東陽云ふ、人但だ律詩起結の難きを知りて、而して轉語の難きを知らず、第五第七句、尤も宜しく力を著くべしと、是れ亦然り、然れども、未だ之れを盡さざるなり、今且つ之れを思ふに、第五第六、後聯の二句、宜しく其の力を同うすべきなり、唯だ第五句のみなるべからざるなり、第七第八の二句、亦宜しく其の力を同うすべし、唯だ第七句力を著くれば、則ち固結すべからざるなり。

五七言絶句は、則ち起承の句を平易にし、轉句意を轉じ以て其の句勢を強くし、結句は轉句より生じて、且つ起承に相照し、以て其の意を結ぶべきなり、作者或は多く意を起承に盡し、而して轉結に窮すれば、則ち虎頭狗尾を爲すのみ、然れども、且つ五言と七言と、其の體裁同じからず、五言は則ち含蓄多く、七言は則ち流動多し、其れ亦唐詩を翫味して、而して以て知るべきなり。

少年輩或は絶句を易しとし、而して律を難しとし、未だ

而強欲作律者、遂不能成詩也、先作絕句、百數、而熟乎其體、而後可習作律也、張蔚然曰、五言古難于七言古、七言古難于絕、絕難于律、李東陽曰、李太白集、七言律止二三首、孟浩然集、止二首、孟東野集、無一首、皆以名於天下、傳後世詩、奚必以律爲哉、此等之言、實然矣哉、故少年輩、不可以絕句、以爲易也、

絕句實難於律矣、然亦因其人之稟性、而自有所長所短也、若李白長於絕句、斯可謂其天性也、是乃如李于鱗所評焉、蓋以不用意得之、而巧者反失矣、白之詩云、廬山西南五老峰、青天削出金芙蓉、九江秀色可攬結、吾將此地巢雲松、此詩從首至九江秀色、則入看而出于口、自然之調、其不用意者也、可攬

作詩實酌

能く絶句の體を得ずして而して強ひて律を作らむと欲する者は、遂に詩を成すこと能はざるなり、先づ絶句を作ること百數にして而して其の體に熟し、而して後に律を作るを習ふ可きなり、張蔚然曰く、五言古は七言古より難く、七言古は絶より難く、絶は律より難しと、李東陽曰く、李太白集、七言律は止だ二三首、孟浩然集は、止だ二首、孟東野集は一首無し、皆以て天下に名ありて後世に傳ふ詩、奚ぞ必ずしも律を以て爲さむやと、此れ等の言、實に然るかな、故に少年輩、絶句を以て易しと爲すべからざるなり、

絶句實に律より難し、然れども、亦其の人の稟性に因り而して自ら長ずる所短なる所あるなり、李白が絶句に長ずる若きも、斯れ其の天性と謂ふべきなり、是れ乃ち于鱗の評する所の如く、蓋し不用意を以て之れを得、而して巧なる者は反つて失す、白の詩に云ふ、廬山の西南五老峰、青天削出す金芙蓉、大江の秀色攬結す可し、吾れ將に此の地に雲松に巢はむとす、此の詩、首より九江の秀色に至りては、則ち看に入りて而して口に出づる自然の調、其の不用意なる者なり、攬結す可しの三字、些しく工夫を用ゆ、結句の措意、巧にして而して勢を失する者

結三字些用工夫、結句造意巧而失勢者歟、其他五七言絕句、若于鱗之選所載焉、則最其秀逸者、作者宜以法效焉也、朱元晦詩云、我來萬里駕長風、絕壑層雲許盪胸、濁酒三杯豪興發、朗吟飛下祝融峰、此詩出於李白之豪放、而可謂首尾不失勢矣。

唐僧玄覽詩云、大海從魚躍、長空任鳥飛、朱元晦嘗書此句、且跋之曰、大丈夫處世不可無此氣象、此句實見氣象、元晦固好此氣象、故其祝融峰之詩、亦足見其氣象矣。

詩者所以言志、而後世之作詩、雖多工設詞、非其實情、然亦足以觀其人心之曲直剛柔矣、然且唐代以詩爲選級、則亦繆戾矣、宣宗時、令狐相進李遠、宣宗曰、比聞李遠詩云、長

か、其他の五七言絶句にして、于鱗の選に載する所の若きは、則ち最も其の秀逸なる者、作者宜しく以て法效すべし、朱元晦の詩に云ふ、我來つて萬里長風に駕し、絶壑層雲許く胸を盪す、濁酒三杯豪興發し、朗吟飛び下る祝融峰、此の詩、李白の豪放より出で、而して首尾勢を失せずと謂ふべし。

唐の僧玄覽の詩に云ふ、大海魚の躍るに從ひ、長空鳥の飛ぶに任す、朱元晦嘗て此の句を書して、且つ之れに跋して曰く、大丈夫の世に處する、此の氣象無かるべからずと、此の句實に氣象を見る、元晦固より此の氣象を好む、故に其の祝融峰の詩も、亦其の氣象を見るに足れり。

詩は志を言ふ所以、而して後世の作詩、多くは工に詞を設け、其の實情に非ずと雖へども、然れども、亦以て其の人心の曲直剛柔を觀るに足れり、然れども、且つ唐代詩を以て選級と爲すは、則ち亦繆戾なり、宣宗の時、令狐相李遠を進む、宣宗曰く、比る聞く、李遠の詩に云ふ、長日唯だ銷す一局の棋と、豈に以て郡に臨むべけむやと、斯の如

唯銷一局棋豈可以臨郡哉如斯者可謂泥於詞矣以詩觀人者因其風調趣向以可觀其氣質也白樂天詩云無事日月長不羈天地濶孟郊詩云出門卽有礙誰謂天地寬斯自知其曠與褊其氣質可知也李紳詩云春種一粒粟秋收萬顆子四海無閒田農夫猶餓死鋤禾日當午汗滴禾下土誰知盤中殮粒粒皆辛苦呂溫云此人必爲卿相果如其言斯亦所以觀其志焉作者宜省戒也且李白詩多豪放杜甫詩多悲慨亦其氣質不可誣焉耳。

古詩則十九首以下至於六朝可以儀刑焉近體則唐人其宗也而唐詩之纂集雖多也李于鱗之選最其醇粹也則作者宜以爲準

作詩實的

き者は詞に泥むと謂ふべし詩を以て人を觀るは其の風調趣向に因りて以て其の氣質を觀るべきなり白樂天の詩に云ふ無事日月長く不羈天地闊し孟郊の詩に云ふ門を出づれば卽ち礙有り誰か謂ふ天地寬しと斯れ自ら知る其の曠と褊と其の氣質知るべきなり李紳の詩に云ふ春は種う一粒の粟秋は收む萬顆の子四海閒田無し農夫猶餓死す禾を鋤きて日午に當り汗は滴る禾下の土誰か知らむ盤中の殮粒々皆辛苦呂溫云ふ此人必す卿相と爲らむと果して其の言の如し斯れ亦其の志を觀る所以なり作者宜しく省戒すべきなり且つ李白の詩多くは豪放杜甫の詩多くは悲慨亦其の氣質誣ふべからざるのみ。

古詩は則ち十九首以下六朝に至る以て儀刑すべし近體はち唐人其の宗なり而して唐詩の纂集多しと雖へども于鱗の選最も其の醇なれば則ち作者宜しく以て準的と爲すべし然れども常を厭ひ奇を好むは斯

九

的焉。然厭常好奇、斯庸俗之態、而于鱗、唐詩選者、幼童亦以爲常、則或厭之、更好新奇者、固不得詩之所以爲詩故也、明解縉云、漢魏質厚於文、六朝華浮於實、具文質之中、華實之宜、惟唐人爲然、故後之論詩、以唐爲尙、宋人以議論爲詩、元人粗豪、不脫氈裘、酪之氣、雖欲追唐邁宋、去詩益遠矣、此評亦可以鑒焉。

論作詩體裁者、非亦不多也、然後則南宋嚴滄浪詩話、元陳繹會詩譜、明王敬美藝圃卮餘、前則梁鍾嶸詩品、是最其精密者也、作者不可以不覽也。

予之比少壯也、則作詩者、依嚴滄浪、及明人之指揮、以辨宋之俗臭、而專學唐之風調、乃

れ庸俗の態にして、而して于鱗の唐詩選は、幼童も亦以て常と爲し、則ち或は之れを厭ひ、更に新奇を好むは、固より詩の詩たる所以を得ざる故なり、明の解縉云ふ、漢魏は質文より厚く、六朝は華實に浮ぐ、文質の中、華實の宜しきを具するは、惟だ唐人を然りと爲す、故に後の詩を論する、唐を以て尙と爲す、宋人は議論を以て詩と爲し、元人は粗豪にして、氈裘、酪の氣を脱せず、唐を追ひ、宋に邁ぎむと欲すと雖へども、詩を去ること、益遠しと、此の評亦以て鑒みるべし。

作詩の體裁を論する者、亦多からざるに非ず、然れども、後には則ち南宋の嚴滄浪の詩話、元の陳繹會の詩譜、明の王敬美の藝圃卮餘、前には則ち梁の鍾嶸の詩品、是れ最も其の精密なる者なり、作者以て覽ざるべからざるなり。

予の少壯なる比ひ、則ち詩を作る者、嚴滄浪、及び明人の指揮に依りて、以て宋の俗臭を辨じ、而して専ら唐の風調を專むで、乃ち詩を善くする者、世に多く有り、而して

善詩者、世多有焉、而其集往往行于世矣、而近年聞之、或稱宋元體、而務出奇巧、俚諺諧體、以爲詩者、亦世多有焉、是流俗之所以使然也歟、夫宋元之於詩、以爲何是原焉耶、蘇東坡、黃山谷、陸放翁之徒、皆是學唐人、以擬議之、加以其奇巧者耳、而今之作者、不學宋人之所學、而學宋人之新奇、斯猶不學柳下惠之所可、而學柳下惠之所爲也、又譬之如學畫者、欲學畫虎、而殆爲如猫、欲學其如猫、而當爲怪物、不思之甚也。

司馬溫公曰、詩云、祥羊墳首、三星在留、言不可久、古人爲詩、費於意在言外、使人思而得之、近世詩人、唯杜子美、最得詩人之體、又歐陽永叔、好誦竹逕通幽處、禪房花木深之句、

作詩實の

其の集、往往世に行はる、而るに近年之れを聞く、或は宋元體と稱し、而して務めて奇巧を出し、俚諺諧體、以て詩と爲す者、亦世に多く有り、是れ流俗の然らしむる所以なるか、夫れ宋元の詩に於ける、以て何れに是れ原くと爲すか、蘇東坡、黃山谷、陸放翁の徒、皆是れ唐人を學び、以て之れに擬議し、加ふるに其の奇巧を以てする者のみ、而して今の作者、宋人の學ぶ所を學ばず、而して宋人の新奇を學ぶは、斯れ猶柳下惠の可なる所を學ばずして、而して柳下惠の爲す所を學ぶがごときなり、又之れを譬ふるに、畫を學ぶ者、虎を畫くを學ばんと欲して、而して殆ど猫の如きを爲し、其の猫の如きを學ばむと欲し、而して當に怪物を爲すべきが如し、思はざるの甚しきなり。

司馬溫公曰く、詩に云ふ、祥羊墳首、三星在留、とは、久かるべからざるを言ふ、古人詩を爲る、意、言外に在るを費ぶ、人をして思ひて而して之れを得しむ、近世の詩人、唯だ杜子美、最も詩人の體を得たりと、又歐陽永叔好みて、竹逕幽處に通じ、禪房花木深し、の句を誦し、以て及ぶ

以爲不可及、此佗東坡山谷放翁之徒、隨其所好、而宋人之所以慕唐人者、皆尙其興象風調爾、然及其自作也、則或陷於理窟、斯其時勢窮理之弊歟、黃山谷云、學老杜詩、所謂刻鵠而不成、尙類鶩也、學晚唐諸人詩、所謂作法於涼、其弊猶貪、作法於貪、弊將若之何、又嚴滄浪云、近代諸公、乃作奇特解會、遂以文字爲詩、以才學爲詩、以議論爲詩、夫豈不工、終非古人之詩也、斯宋人之詩、其病可以知也、而近世輕淺作者、妄厭唐調、好擬宋人、人奇巧、是亦嚴羽所謂野狐外道、蒙蔽其眞識、不可救藥、終不悟者、又所謂有下劣詩魔、入其肺腑之間、由立志之不高者也。

昔年門人某、以當時唱宋風者之新年詩、示

べからずと爲す、此の他、東坡山谷放翁之徒、其の好む所に隨ひ、而して宋人の唐人を慕ふ所以は、皆其の興象風調を尙ぶのみ、然れども、其の自ら作るに及びては、則ち或は理窟に陷る、斯れ其の時勢窮理の弊か、黃山谷云、老杜の詩を學ぶは、謂ゆる鵠を刻し、而して成らざるも、尙鶩に類するなり、晚唐諸人の詩を學ぶは、謂ゆる法を涼に作すも、其の弊猶貪、法を貪に作さば、弊將に之れを若何せむとす、又嚴滄浪云、近代の諸公、乃ち奇特の解會を作し、遂に文字を以て詩と爲し、才學を以て詩と爲し、議論を以て詩と爲す、夫れ豈に工ならざらむや、終に古人の詩に非るなりと、斯れ宋人の詩、其の病以て知るべきなり、而るに近世輕淺の作者、妄に唐調を厭ひて、好みて宋人の奇巧に擬するは、是れ亦嚴羽の謂ゆる野狐外道、其の眞識を蒙蔽し、救藥すべからず、終に悟らざる者、又謂ゆる下劣の詩魔ありて、其の肺腑の間に入る、立志の高からざるに由る者なり。

昔年門人某、當時宋風を唱ふる者の新年の詩を以て予に

予問其可否予覽之其詞鄙拙其意不屬無
 興象無聲調竟不成詩可譽盛也因戲擬其
 徒之所好賦以示門生曰書生罷業祝新年
 有酒有魚亦有錢出谷遷喬彼其鳥處貧辭
 寵是斯賢黃唇強舐歐蘇粕白鬢猶流李杜
 涎豪放任春拋世務利名兩遞醉中仙如斯
 則猶宋人之口氣而有詩之形歟然是不可
 以爲詩非予之所好小子戒勿喜如斯風
 竊古人之詩偷句勢上也偷意趣次也偷文
 詞其下也唐人則偷之於六朝以上古人往
 往有徵之者又盛唐以下則有偷之於初唐
 者李白蘇臺覽古只今惟有西江月會照吳
 王宮裏人全竊於衛萬吳宮怨其鳳皇臺詩
 則擬崔顥黃鶴樓詩而敵之者也沈佺期詩

作詩質的

示して其の可否を問ふ予之れを覽るに其の詞鄙拙其
 の意屬せず興象無く聲調無く竟に詩を成さず譽盛
 すべきなり因りて戲に其の徒の好む所に擬し賦して
 以て門生に示して曰く書生業を罷めて新年を祝す酒
 有り魚有り亦錢有り谷を出でて喬に遷る彼の其の鳥
 貧に處し寵を辭す是れ斯の賢黃唇強ひて舐る歐蘇が
 粕白鬢猶流す李杜が涎豪放任に任して世務を抛ち利
 名兩ながら遷る醉中の仙斯の如きも則ち猶宋人の口
 氣にして而して詩の形有らむか然れども是れ以て詩
 と爲すべからず予の好む所に非ず小子戒めて斯の如
 きの風體を喜ぶこと勿れ。

古人の詩を竊むに句勢を偷むは上なり意趣を偷むは
 次なり文詞を偷むは其の下なり唐人は則ち之れを六
 朝以上に偷む古人往往之れを徵する者あり又盛唐以
 下は則ち之れを初唐に偷む者あり李白の蘇臺覽古の
 「只今惟だ西江の月のみ有りて會て吳王宮裏の人を照
 すは全く衛萬の吳宮怨を竊む其の鳳皇臺の詩は則
 ち崔顥の黃鶴樓の詩に擬して而して之れに敵する者な
 り沈佺期の詩に「南溟海に浮ぶ人何れの處ぞ北衛陽を

南浮漲海、人何處、北望衡陽、雁幾羣、而韓翃詩、前臨漲海、無人過、卻望衡陽、少雁飛、是全竊、佞期之詩者、而其格調亦劣矣、王維詩、九天宮殿閉闔闔、萬國衣冠拜冕旒、今唐詩選作三九天闔闔開而杜甫詩、闔闔開黃道、衣冠拜紫宸、是全竊乎、摩詰、而其風調不及焉、戴叔倫、除夜宿石頭詩、旅館誰相問、寒燈獨可親、此五律、自高適、除夜絕句、想出焉、又送友人東歸詩、萬里楊柳色、出關逢故人、此五律、自王維、渭城朝雨、興發焉、盧綸、月照何年樹、花逢幾度人、此一聯、蓋得於張若虛、不知江月照何人也、盛唐以下、多有如斯者也、明七子、七言聯句、多竊、句勢於唐人律調、作者覺而可擇焉也、唐人、以詩爲專門、且善用故事、然讀書不精、

望めば雁幾群、而して韓翃の詩に、前漲海に臨めば人の過ぐる無く、卻つて衡陽を望めば雁の飛ぶこと少なり、是れ全く佞期の詩を竊む者にして、而して其の格調も亦劣れり、王維の詩に、九天の宮殿闔闔を開き、萬國の衣冠冕旒を拜す、(今唐詩選に、九天闔) 而るに杜甫の詩に闔闔、黃道を開き、衣冠紫宸を拜す、是れ全く摩詰に竊みて、而して其の風調及ばず、戴叔倫の除夜石頭に宿する詩「旅館誰か相問はむ、寒燈獨親しむ可し、此の五律、高適の除夜の絶句より想出す、又友人の東歸を送る詩に、萬里楊柳の色、關を出れば故人に逢はむ、此の五律は、王維の渭城朝雨より興發す、盧綸の「月は何年の樹を照し、花は幾度の人に逢ふ、此の一聯は、蓋し張若虛の「知らず江月何人を照す」より得るなり、盛唐以下、多く斯の如き者あるなり、明の七子の七言聯句は、多く句勢を唐人の律調に竊む、作者覺て而して擇ふべし。

唐人詩を以て專門と爲す、且つ善く故事を用ゆ、然れど

則不免乎謬誤。宋之間詩、錦、飲、周、文、樂、汾、歌、漢、武、才、王、維、詩、欲、笑、周、文、歌、燕、鎬、還、輕、漢、武、樂、橫、汾、蓋、斯、摩、詰、微、乎、之、間、而、與、致、謬、也、魚、藻、之、詩、美、武、王、也、非、文、王、都、鎬、也、又、王、維、詩、衛、青、不、敗、由、天、幸、李、廣、無、功、爲、數、奇、斯、不、敗、由、天、幸、則、霍、去、病、非、衛、青、也、高、適、詩、李、廣、從、來、先、將、士、衛、青、未、肯、學、孫、吳、斯、不、學、孫、吳、兵法、則、霍、去、病、非、衛、青、也、如、斯、之、誤、亦、將、不、寡、故、作、者、宜、法、效、乎、唐、詩、然、於、其、事、蹟、則、不、可、以、不、自、擇、也。

詩有別材、非關書也、詩有別趣、非關理也、然非讀書之多、明理之至者、則不能作此、嚴滄浪、李東陽之徒、所與言焉、實其然也、然且今謂之、雖讀書多也、徒記古事耳、而不有志操、

作詩實的

も、讀書精しからざれば、則ち謬誤を免れず、宋之間の詩に「錦、飲、周、文、の樂、汾、歌、漢、武、の才、王、維、の詩に、周、文、の鎬に燕するを歌ふを笑はむと欲し、還つて輕んず漢武の汾に横ふを樂むとを、蓋し斯れ摩詰之間に微ひ、而して與に謬りを致すなり、魚藻の詩は、武王を美むるなり、文王、鎬に都するに非ざるなり、又王維の詩に「衛青敗れざるは天幸に由る、李廣功無きは數奇の爲めなり、斯れ敗れず天幸に由るは、則ち霍去病にして衛青に非ざるなり、高適の詩に「李廣從來將士に先つ、衛青未だ孫吳を學ぶことを肯せず」は、斯れ孫吳の兵法を學ばざるは、則ち霍去病にして、衛青に非ざるなり、斯の如きの誤り、亦將に寡からざらむとす、故に作者宜しく唐詩に法效す、べきも然れども、其の事蹟に於ては、則ち以て自ら擇ばざるべからざるなり。

詩に別材あり、書に關するに非ざるなり、詩に別趣有り、理に關するに非ざるなり、然れども、書を讀むの多く、理を明にするの至る者に非ざれば、則ち作る能はず、此れ嚴滄浪、李東陽の徒の與に言ふ所にして、實に其れ然るなり、然れども、且つ今之れを謂ふ、讀書多しと雖へども、

者、詩無氣象、趣向鄙陋、華而不實、柔而不剛、譬猶畫工善寫花鳥、有其形、有其色、而無香、無聲也、楊升菴曰、杜子美云、讀書破萬卷、下筆如有神、此子美自言其所得也、讀書雖不爲作詩設、然胷中有萬卷書、則筆下自無一點塵矣、是亦然矣、然予有疑於杜甫之詩、有孔丘盜跖俱塵埃句、以是觀之、其於詩也、雖名達也、其人則予不取也、若志于聖學之人、豈可忍以聖人與盜跖並言乎哉、見其詩文、而可知其爲人也、則我黨之人、雖一言一句也、可不輕易也。

文詞之才、有敏有遲、於其作文、相如之遲、鄒陽之敏、其稟才之異、不可相誣也、於詩亦爾、李白之不用意、杜甫之苦吟、是亦其才不可

徒に古事を記するのみにして、備して志操有らざる者は、詩に氣象無く、趣向鄙陋、華にして而して實ならず、柔にして而して剛ならず、譬へば、猶畫工が善く花鳥を寫し、其の形あり、其の色あるも、而かも香無く、聲無きかごときなり、楊升菴曰く、杜子美云、讀書萬卷を破る、筆を下して神有るが如し、此れ子美自ら其の得る所を言ふなり、讀書は作詩の爲に設けずと雖へども、然れども、胷中萬卷の書あれば、則ち筆下自ら一點の塵無しと、是れ亦然り、然れども、予杜甫に疑あり、甫の詩に、孔丘盜跖俱に塵埃の句あり、是れを以て之れを觀れば、其の詩に於けるや、名達と雖、其の人は則ち予取らざるなり、聖學に志す人の若き、豈に聖人を以て盜跖と並言するに忍ぶべしむや、其の詩文を見て、而して其の人と爲りを知るべきなり、則ち我が黨の人、一言一句と雖、輕易にせざるべきなり。

文詞の才、敏あり遲あり、其の文を作るに於て、相如の遲、鄒陽の敏、其の稟才の異、相誣ふべからざるなり、詩に於ても亦爾り、李白の不用意、杜甫の苦吟、是れ亦其の才、相誣ふべからざるなり、明の都穆云、世人詩を作る、敏捷

相誣也、明都穆云、世人作詩以敏捷爲奇、以連篇累冊爲富、非知詩者也、老杜云、語不驚人死不休、蓋詩須苦吟、則語方妙、不特杜爲然也、賈闓仙云、兩句三年得、一吟雙淚流、孟東野云、夜吟曉不休、苦吟鬼神愁、此都穆之言、非不是也、今世作詩者、亦多欲敏捷、然不有其才、而初不得趣向、徒索搜文字、強疾作句、則終不成詩、故不可敢喜敏捷、若得其趣向、而首尾相應、乃成一篇詩、然不可直以示人、熟吟誦之、可以鍊其風調也、然亦不可必至苦心、唯伸其志情、而因其興象、乃欲以使人感焉耳、非敢可以文詞驚人、也、故子美之苦吟、亦非敢所以可慕也、歐陽修云、孟郊賈島皆以詩窮至死、而平生尤自喜爲窮苦之

作詩實的

を以て奇と爲し、連篇累冊を以て富と爲すは、詩を知る者に非ざるなり、老杜云ふ、詩人を驚さざれば死すとも休まずと、蓋し詩は苦吟を須ちて則ち語方に妙、特に杜のみ然りと爲さざるなり、賈闓仙云ふ、兩句三年に得、一吟雙淚流る、孟東野云ふ、夜吟曉休まず、苦吟鬼神愁ふと、此の都穆の言、是ならざるに非ざるなり、今世詩を作る者も、亦多く敏捷を欲す、然れども、其の才あらず、而して初めより趣向を得ずして、徒に文字を索搜し、強ひて疾く句を作らば、則ち終に詩を成さず、故に敢て敏捷を喜ぶべからず、若し其の趣向を得、而して首尾相應じ、乃ち一篇の詩を成すとも、然れども、直に以て人に示すべからず、熟之れを吟誦し、以て其の風調を鍊るべきなり、然れども、亦必ず心を苦しむるに至るべからず、唯だ其の志情を伸べ、而して其の興象に因りて、乃ち以て人をして感ぜしめむと欲するのみ、敢て文詞を以て人を驚かさずべきに非ざるなり、故に子美の苦吟も、亦敢て慕ふべき所以に非ざるなり、歐陽修云ふ、孟郊賈島、皆詩を以て窮して死するに至る、而して平生尤も自ら喜んで窮苦の句を爲る、又李白、杜甫に戯れて云ふ、借問別來太瘦生、總從前作詩の爲に苦しむと、此れ杜甫及び賈嶋、孟郊

句、又李白戲杜甫云、借問別來太瘦生、總爲從前作詩苦、此杜甫及賈島孟郊之徒、終身太苦於詩者、則亦非學者之所以敢美也。

蓋作詩者、素何由也、春秋風月之望、花鳥物候之看、山水煙波之觀、人世哀樂之會、觸乎其物、應乎其事、感於心胸、發於唇舌、乃假文詞、以伸其志情、斯所謂詩者也、亦是學問之餘暇、遊于藝之一端、而非可敢以言義理也、亦非可敢以費心力也、故我黨小子、苟欲學作詩者、尙鑒于茲、而其興象風調、則可法乎唐人、而其役心力於詩、則不可倣乎唐人也。

餘話

楊升菴登眺山寺、見雨霽虹霓、下飲澗水、得句云、渴虹下飲玉池水、斜日橫分蒼嶺霞、張

の徒、終身太だ詩に苦しむ者、則ち亦學者の敢て美とする所以に非ざるなり。

蓋詩を作るは、素と何の由ぞや、春秋風月の望、花鳥物候の看、山水煙波の觀、人世哀樂の會、其の物に觸れ、其の事に應じ、心胸に感じ、唇舌に發し、乃ち文詞を假りて、以て其の志情を伸ぶ、斯れ謂ゆる詩なる者なり、亦是れ學問の餘暇、藝に遊ぶの一端にして、而して敢て以て義理を言ふべきに非ざるなり、亦敢て以て心力を費すべきに非ざるなり、故に我が黨の小子、苟も詩を作ること、を學ばむと欲せば、尙くば茲に鑒み、而して其の興象風調は、則ち唐人に法るべく、而して其の心力を詩に役するは、則ち唐人に倣ふべからざるなり。

餘話

楊升菴、山寺に登眺し、雨霽れ、虹霓下りて澗水を飲むを得、見、句を得て云ふ、渴虹下り飲む玉池の水、斜日横に分る蒼嶺の霞、張愈光曰く、斜の字猶未だ渴の字に稱はずと、

愈光曰、斜字猶未稱渴字、後一年、升菴偶、閱
 莊子、遂改睨日、愈光曰、渴虹睨日、古今奇句、
 此斜渴不相稱、睨渴以爲奇對者、作者所以
 宜用意也、且此一聯氣象、宋詩亦有如斯佳
 者也。

左太仲詠居詩云、言論準宣尼、辭賦擬相如、
 是豈以若相如者爲聖人之對可也乎哉、文
 人之不崇德義、亦可以惡也。

稽康幽憤詩云、母兄鞠育、有慈無威、恃愛肆
 姐、不訓不師、爰及冠帶、憑寵自放、予讀此詩、
 疑其爲人、爲子爲弟者、舍己之懶惰、而歸罪
 於母兄可也乎。

東坡嘗戲謂佛印云、讀古人詩、云時聞啄木
 鳥、疑是打門僧、又云、鳥宿池邊樹、僧敲月下

作詩實的

後一年、升菴偶、莊子を閲し、遂に睨日に改む、愈光曰く、渴
 虹睨日、古今の奇句と、此の斜渴相稱はず、睨渴以て奇對
 と爲せしは、作者宜しく意を用ふるべき所以なり、且つ
 此の一聯の氣象、宋詩にも亦斯の如き佳なる者あるな
 り。

左太仲の詠居の詩に云ふ、言論宣尼に準じ、辭賦相如に
 擬す、是れ豈に相如が若き者を以て、聖人の對と爲して
 可ならむや、文人の德義を崇ばざる亦以て惡むべきな
 り。

稽康の幽憤の詩に云ふ、母兄鞠育、慈有りて威無し、愛を
 恃みて姐を肆にし、訓せず師せず、爰に冠帶に及びて、寵
 を憑みて自ら放にす、予此の詩を讀みて、其の人と爲り
 を疑ふ、子と爲り弟と爲る者、己の懶惰を捨て、而して
 罪を母兄に歸して可ならむや。

東坡嘗て戲に佛印に謂ひて云ふ、古人の詩を讀むに云ふ
 「時に聞く木を啄する鳥、疑ふらくは是れ門を叩く僧か
 と、又云ふ、鳥は宿す池邊の樹、僧は敲く月下の門、古人必

門、古人必以鳥對僧、自有深意、佛印云、所以老僧今日常得對學士、東坡無以應、斯嘲佛印、已反爲鳥可笑也。

明初毗陵士人女、年十六、能詩、其破錢詩云、半輪殘月掩塵埃、依佛猶有開元字、想得清光未破時、買盡人間不平事、賦得好矣、白頭先生、亦將不及。

唐貞元中、張生與崔氏女鶯鶯往來、後棄之、鶯鶯已委身於人、張生亦娶、適經其所、求見不得、鶯鶯知之、潛賦一章云、一從銷瘦減容光、萬轉千回懶下牀、不爲旁人羞不起、爲郎憔悴卻羞郎、此詩情態可愛。

岑參詩云、三殿花香入紫薇、唐中書省、謂之紫薇省、岑參時在中書省、故有此言、白居易

ず鳥を以て僧に對す、自ら深意あり、佛印云、老僧今日常に學士に對するを得る所以と、東坡以て應ふること無し、斯れ佛印を嘲りて、已反つて鳥と爲る、笑ふべきなり。

明の初、毘陵士人の女、年十六、詩を能くす、其の破錢の詩に云ふ、半輪の殘月塵埃に掩はる、依佛として猶開元の字有り、想得たり清光未だ破れざる時、買盡す人間不平の事、賦し得て好し、白頭先生も亦將に及ばざらむとす。

唐の貞元中、張生、崔氏の女鶯鶯と往來し、後之れを棄つ、鶯鶯已に身を人に委し、張生も亦娶る、適其所を經、見むことを求めども得ず、鶯鶯之れを知り、潛に一章を賦して云ふ、一たび銷瘦して容光を減せし、従り、萬轉千回牀を下るに懶し、旁人の爲に羞ぢて起たざるにあらず、郎が爲に憔悴して卻つて郎に羞づ、此の詩情態愛すべし。

岑參の詩に云ふ、三殿の花を紫薇に入る、唐の中書省、之れを紫薇省と謂ふ、岑參時に中書省に在り、故に此の言あり、白居易の詩に、紫薇花は對す紫薇郎と、亦中書郎を

詩、紫薇花對紫薇郎亦謂中書郎、今唐詩選作紫微誤矣。

題缺或以爲子規非也、儲光義詩云、嬾姑鳴空澤、題缺傷秋草、岑參暮秋山行詩云、題缺昨夜鳴、蕙草色已陳、廣韻、題缺春分鳴、則衆芳生、秋分鳴、則衆芳歇、字又作鶉缺、卓氏藻林以爲歲暮之候。

雲淡、輕近午天、傍花隨柳過前川、時人不識吾心樂、將謂儉閑學少年、此程伯淳之詩、可謂中唐風調也、所謂心樂、以他人謂之、唯當爲雅趣、作者之意、蓋亦將以爲使人思其樂何如歟。

雲裏帝城雙鳳闕、雨中春樹萬人家、高調清景固有言外自然佳趣矣、僧萬庵東叡山詩

作詩賞的

謂ふ、今唐詩選に紫微に作るは誤りなり。

題缺、或は以て子規と爲すは非なり、儲光義の詩に云ふ、嬾姑空澤に鳴き、題缺秋草を傷む、岑參の暮秋山行に云ふ、題缺昨夜鳴き、蕙草色已に陳す、廣韻に、題缺春分に鳴けば、則ち衆芳生じ、秋分に鳴けば、則ち衆芳歇む」と、字又鶉缺に作る、卓氏藻林に、以て歲暮の候と爲す。

「雲淡く風輕し近午の天、花に傍ひ柳に隨つて前川を過ぐ、時人吾が心の樂しきを識らず、將に謂はむとす閑を偷むで少年を學ぶ」と此れ程伯淳の詩、中唐の風調と謂ふべきなり、謂はゆる心の樂しきは、他人を以て之れを謂はば、唯だ當に雅趣たるべし、作者の意は、蓋し亦將に以て人をして、其の樂み何如むと思はしめむとする歟。

「雲裏の帝城雙鳳闕、雨中の春樹萬人家、高調清景、固より言外自然の佳趣あり、僧萬庵の東叡山の詩に、之れを竊みて云ふ、雲中の宮殿諸天の宅、雨外の春煙五鳳樓、斯

竊之云、雲中宮殿諸天宅、雨外春煙五鳳樓、斯只強擬似者、而諸天宅五鳳樓、皆虛設、非實景也。

雞聲茅店月、人跡板橋霜、斯亦五言妙對、李東陽評之云、人但知其能道、竊愁野況於言、意之表、不知二句中、不用一二間字、止提撥出、物色字樣、音韻鏗鏘、意象具足、始爲難得。李德裕云、祿山之亂、上皇將欲遷幸、乃登花萼樓、四顧悽愴、令樂工歌水調、歌曰、山川滿目淚沾衣、富貴榮華能幾時、不見只今汾水上、唯有年年秋雁飛、上聞之、潛然出涕、顧待御者曰、誰爲此詞、或對曰、宰臣李嶠、上曰、眞才子也、不待曲終而去、此詩實使人感泣矣、李于鱗何不載其選焉。

れ只だ強ひて擬似する者にして、而して諸天の宅五鳳樓は、皆虛設、實景に非ざるなり。

「雞聲茅店の月、人跡板橋の霜、斯れ亦五言の妙對、李東陽之れを評して云ふ、人但だ其の能く竊愁野況を言意の表に遺ふを知りて、二句の中、一二の間字を用ひず、止だ提撥し出す、物色字樣、音韻鏗鏘、意象具足、始めより得難しと爲すを知らずと。」

李德裕云ふ、祿山の亂、上皇將に遷幸せむとす、乃ち花萼樓に登る、四顧悽愴、樂工をして水調を歌はしむ、歌ひて曰く、山川滿目涙衣を沾す、富貴榮華能く幾時ぞ、見ず只今汾水の上り、唯だ年年秋雁の飛ふ有り」と上之れを聞きて、潛然と涕を出し、侍御者を顧みて曰く、誰か此の詞を爲るか、或對へて曰く、宰臣李嶠と、上曰く、眞の才子なりと、曲の終るを待たずして去る、此の詩實に人をして感泣せしむ、李于鱗何ぞ其の選に載せざるや。

李白清平調、春風拂檻、李潛撰異記、作春風拂曉、此觀於露華濃、檻作曉爲是矣、且此時也、玄宗乘月夜之興也。

唐陳京葆化錄云、李頻與方處士于爲吟友、頻有題四皓廟詩、自言奇絕、云東西南北人、高跡此相親、天下已歸漢、山中猶避秦、龍樓曾作客、鶴鷺不爲臣、獨有千年後、青松廟木春、示於于、于笑而言、善則善已、然內有二字未穩、作字太粗、而難換、爲字甚不當、于聞率土之濱、莫非王臣、請改作稱字、頻遂拜爲一字之師、唐人之精鍊于詩、亦可以見也。

白行簡三夢記云、元和四年、河南元微之、爲監察御史、奉使劍外、諭句、于與仲兄樂天、隴西李杓直、同遊曲江、詣慈恩佛舍、徧歷僧院、

作詩賞的

李白的清平調の、春風檻を拂ふを、李潛の撰異記に、春風曉を拂ふに作る、此れ露華濃なりに觀れば、檻を曉に作るを是と爲す、且つ此の時は、玄宗月夜の興に乗するなり。

唐の陳京の葆化錄に云ふ、李頻、方處士、于と吟友たり、頻四皓廟に題する詩あり、自ら奇絶と言ふ、云く、東西南北の人、高跡此に相親しむ、天下已に漢に歸す、山中猶秦を避く、龍樓曾て客と作る、鶴鷺臣と爲らず、獨有り千年の後、青松廟木の春と、于に示す、于笑ひて言ふ、善は則ち善なり、然れども、内二字の未だ穩ならざるあり、作の字太だ粗、而れども換へ難し、爲の字甚だ當らず、于聞、率土の濱、王臣に非ざるは莫しと、請ふ改めて稱の字と作さむ、頻遂に拜して一字の師と爲す、唐人の詩に精鍊なる、亦以て見るべし。

白行簡の三夢記に云ふ、元和四年、河南の元微之、監察御史と爲り、劍外に奉使して句を諭ゆ、于、仲兄樂天、隴西の李杓直と、同じく曲江に遊び、慈恩佛舍に詣り、徧く僧院を歴、淹留時を移し、同じく杓直の修行里の第に詣り、酒

淹留移時、同詣杓直修行里第、命酒對酌、甚歡暢、兄停杯曰、微之當遠梁矣、題一篇于壁、其詞曰、春來無計破春愁、醉折花枝作酒籌、忽憶故人天際去、計程今日到梁州、實二十一日也、十許日、會梁州使適至、獲微之書一函、後寄紀夢詩一篇、其詞曰、夢君兄弟曲江頭、也入慈恩院裏遊、屬吏喚人排馬去、覺來身在古梁州、日月與遊寺題詩、率同斯白居易元稹、結交之感、可謂奇矣、起句、本事詩、作「花來、作「忽驚、然此行情記書、爲正。

唐寧王曼貴盛、寵妓數十人、宅左有賣餅者、妻織白明媚、王一見注目、厚遺其夫、取之、寵惜逾等、環歲因問之、汝復憶餅師否、默然不對、王召餅師使見之、其妻注視、雙淚垂頰、若

を命じて對酌し、甚だ歡暢す、兄杯を停めて曰く、微之當に梁に遠すべしと、一篇を壁に題す、其の詞に曰く、春來春愁を破るに計無し、酔うて花枝を折つて酒籌と作す、忽ち憶ふ故人天際に去るを、程を計るに今日梁州に到らむ實に十一日なり、十許日にして、梁州の使適至るに會し、微之の書一函を獲たり、後に夢を紀する詩一篇を寄す、其の詞に曰く、夢む君が兄弟曲江の頭、也た慈恩院裏に入つて遊ぶ、吏に屬し人を喚むで馬を排して去る、覺め來れば身は古梁州に在り、日月と寺に遊び詩を題すると率ね同じと、斯れ白居易元稹、結交の感奇と謂ふべし、起句、本事詩に、花事同じく酔うて春愁を破るに作る、覺來は忽驚に作る、然れども此の行簡の記實に正と爲すべし。

唐の寧王曼貴盛なり、寵妓數十人、宅の左に餅を賣る者あり、妻、織白明媚、王一見して目を注ぎ、厚く其の夫に遺りて之れを取る、寵惜等に逾ゆ、環歲因りて之れに問ふ、汝復た餅師を憶ふや否や、默然として對へず、王餅師を召して之れを見せしむ、其の妻注視して、雙淚頰に垂れ、情に勝へざるが若し、時に王に座客十餘人あり、皆當時

不勝情時王座客十餘人皆當時文士無不
 悽異王命賦詩王右丞維詩先成曰莫以今
 時寵寧忘昔日恩看花滿眼淚不共楚王言
 此摩詰詩或以第一二句爲一句讀非矣今
 私疑共字當作與。

杜子美詩縱飲久拚人共棄拚字拚同拚本
 字禮少儀云播席前曰拚康熙字典云按廣
 韻普官切音潘今俗沿譌用爲拌棄之拌然
 則子美之詩亦沿譌用之歟。

杜子美遊何將軍山林詩雨拋金鎖甲苔臥
 綠沈鎗宋周少隱竹坡詩話云言甲拋於雨
 爲金所鎖鎗臥於苔爲綠所沈有將軍不好
 武之意又薛氏以綠沈爲精鐵周必大二老
 堂詩話云按符堅使熊邈造金銀細鎧金爲

作詩實的

の文士悽異せざるは無し王命じて詩を賦せしむ王右
 丞維詩先づ成る曰く今時の寵を以てすること莫れ寧
 ぞ昔日の恩を忘れむ花を見る滿眼の淚楚王と共に言
 はず此の摩詰の詩或以へらく第一二句は一句と爲し
 て讀むと非なり今私に疑ふ共の字は當に與に作るべ
 し。

杜子美の詩に縱飲久しく拚て人共に棄つと拚の字は
 拚に同じ拚の本字なり禮の少儀に云ふ席前を掃ふを
 掃と曰ふ康熙字典に云ふ按するに廣韻に普官の切音
 潘今俗譌に沿ひて用ひて拌棄の拌と爲すと然らば則
 ち子美の詩も亦譌に沿ひて之れを用ひたる歟。

杜子美何將軍の山林に遊ぶ詩に雨に抛つ金鎖甲苔に
 臥す綠沈鎗宋の周少隱の竹坡詩話に云ふ言ふは甲雨
 に抛ちて金に鎖され鎗苔に臥して綠に沈めらる將軍
 武を好まざるの意あり又薛氏は綠沈を以て精鐵と爲
 すと周必大の二老堂詩話に云ふ按するに符堅熊邈を
 して金銀細鎧を造りて金を綫と爲し以て之を綫せし
 む蔡琰の詩に云ふ金甲日光に耀くと今に至りて甲の

綾以繹之、蔡琰詩云、金甲耀日光、至今謂甲之精細者、爲鎖子甲、周紫芝工詩、而詩話百篇、疎失如此何耶、姚寬西溪叢語云、北史隋文帝嘗賜張繡綠沈甲、獸文只裝、武庫賦云、綠沈之槍、唐鄭榮聯句、有亭亭孤笋綠沈槍之句、續齊諧記云、王敬伯夜見一女命婢取酒、提一綠沈漆槍、王羲之筆經、有以綠沈漆竹管見遺、蕭子雲詩云、綠沈弓項縱、紫艾刀橫、拔恐綠沈如今、以漆調雌黃之類、調綠漆之、其色深沈、故謂之綠沈、非精鐵也。

杜子美詩、翻身向天仰射雲、是唯當時鞞前才人、仰射雲際飛鳥之謂耳、而謝氏詩源云、更羸善射、每言能仰射入雲中、其妻不信、因以一囊繫箭頭、令射之、及墜驗之、果有白雲

精細なる者を謂ふて鎖子甲と爲す周紫芝之詩に工にして、而して詩話百篇疎失此くの如きは何ぞやと、姚寬の西溪叢語に云ふ、北史に、隋の文帝嘗て張繡に、綠沈甲、獸文貝裝を賜ふ、武庫の賦に云ふ、綠沈の槍と、唐の鄭榮の聯句に、亭亭たる孤笋綠沈槍の句あり、續齊諧記に云ふ、王敬伯夜、一女が婢に命じて酒を取らしめ、一綠沈漆槍を提ぐるを見ると、王羲之の筆經に、綠沈漆竹管を以て造らるゝありと、蕭子雲の詩に云ふ、綠沈弓項縱、紫艾刀橫、拔す、恐くは、綠沈とは、今の漆を以て雌黃を調するの類の如し、綠を調して之れに漆すれば、其の色深沈、故に之れを綠沈と謂ふ、精鐵に非ざるなり。

杜子美の詩に、身を翻して天に向ひ仰いで雲を射る、是れ唯だ當時の鞞前の才人が仰ぎて雲際の飛鳥を射るの謂のみ、而るに、謝氏詩源に云ふ、更羸射を善す、毎に言ふ、能く仰ぎ射て雲中に入ると、其の妻信せず、因りて一囊を以て箭頭に繫けて、之れを射さしむ、墜つるに及びて之れを驗すれば、果して白雲の内在るあり、因りて箭を

在內、因名箭曰鎖雲、以此爲仰射雲之由、附會亦太甚矣、子美感傷於曲江頭之作、豈用如斯工夫耶、承以一箭正墜、雙飛翼、詩意自

著耶

謝氏、詩源、出於潛確類書。

張繼楓橋夜泊詩、起句既曉天、而結句云、夜半鐘聲、談者紛紛、未得、的說、或云、此地有夜半鐘、名無常鐘、又胡元瑞云、詩流借景立言、惟在聲律之調、與象之合、區區事實、彼豈暇計、無論夜半是非、此元瑞之說、亦謾也、詩雖借景、夜半不聞鐘聲、而豈設言夜半鐘聲乎、葉夢得云、歐陽公嘗病、其夜半非打鐘時、蓋公未嘗至吳中、今吳中山寺、實以夜半打鐘、今日諸說皆未得、作者之興象也、蓋泊船中之時、夜半暗聞鐘聲、未知何處鐘也、既月落

作詩實的

名づけて鎖雲と曰ふと、此れを以て、仰ぎて雲を射るの由と爲す、附會も亦太甚し、子美、曲江頭に感傷するの作、豈に斯の如き工夫を用ひむや、承くるに、一箭正に墜つ雙飛翼を以てす、詩意自ら著る、謝氏詩源は、潛確類書に出づ。

張繼の楓橋夜泊の詩の起句は既に曉天、而して結句に、夜半の鐘聲と云ふ、談者紛紛未だ的説を得ず、或は云ふ、此の地に夜半鐘あり、無常鐘と名づくと、又胡元瑞云ふ、詩流景を借りて言を立つ、惟だ聲律の調、興象の合に在り、區區たる事實、彼豈に計るに暇あらむや、夜半の是非を論ずる無しと、此の元瑞の説も亦謾なり、詩景を借ると雖へども、夜半に鐘聲を聞かずして、而して豈に設けて夜半の鐘聲と言はむや、葉夢得云ふ、歐陽公嘗て其の夜半、鐘を打つ時に非ざるを病む、蓋し公未だ嘗て吳中に至らず、今吳中の山寺實に夜半を以て鐘を打つと、今日諸說皆未だ作者の興象を得ざるなり、蓋し船中に泊するの時、夜半暗に鐘聲を聞きて、未だ何れの處の鐘なるを知らざるなり、既に月落ち鳥啼いて霜天に滿つるの時、江楓漁火殘夜の景、眠未だ能く醒めざるの顔に相對

烏啼霜滿天之時、江楓漁火、殘夜之景、相對
眠未、能醒之顔、乃舉頭而望、姑蘇城外、寒山
寺見、乃初知、夜半鐘聲、到客船、則彼寺之鐘
也、此詩興趣最可喜也。

宋戴衢詩云、坐落千門月、吟殘午夜燈、午夜
字奇也、古人有之否、我未之考。

玄宗劍門山詩、唐鄭榮傳信記云、上幸蜀回、
車駕次劍門、門左右、巖壁峭絕、上謂侍臣曰、
劍門天險若此、自古及今、敗亡相繼、豈非在
德不在險耶、因駐蹕、題詩曰、閣劍橫空、峻、鑾
輿出狩回、云云、今唐詩選作劍門橫雲、峻、此
素作橫雲、後以下有仙雲、改爲空、歟、閣劍當
爲劍閣、唐詩選作劍門、蓋皆寫誤。

山房隨筆云、直北某州、有道君題壁一詩、曰、

予乃頭を擧げて而して望めば、姑蘇城外に寒山寺見
ゆ、乃ち初めて夜半の鐘聲、客船に到るは、則ち彼の寺の
鐘なるを知るなり、此の詩の興趣最も喜ぶべきなり。

宋の戴衢の詩に云ふ、坐には落つ千門の月、吟は殘す午
夜の鐘、午夜の字奇なり、古人之れ有るや否や、我未だ之
れを考へず。

玄宗の劍門山の詩、唐の鄭榮の傳信記に云ふ、上、蜀に幸
し、車駕を回し劍門に次す、門の左右、巖壁峭絶、上、侍臣に
謂ひて曰く、劍門の天險此くの若し、古より今に及びて、
敗亡相繼ぐ、豈に德に在りて、險に在らざるに非ずやと、
因りて蹕を駐めて、詩を題して曰く、閣劍空に横つて峻
なり、鑾輿出狩して回る云々、今唐詩選に、劍門雲に横つ
て峻なりに作る、此れ素と雲に横はるに作る、後に、下に
山雲有るを以て、改めて空と爲す歟、閣劍は當に劍閣に
爲るべし、唐詩選に劍門に作る、蓋し皆寫誤なり。

山房隨筆に云ふ、直北の某州に道君の壁に題する一詩

徹夜西風撼破扉、蕭條孤館一燈微、家山回首三千里、目斷天南無雁飛、此徹宗作、爲金所敗之時、歎詩則初唐風調、有餘感也。

宋陳郁話腴云、太祖微時、日詩云、欲出未出、光辣熒、千山萬山如火發、須臾走向天上來、趕卻殘星、趕卻月、此詩風調則非可尙、氣象則既有欲、吞四海之兆、宋西郊野叟詩話亦記之、云、太陽初出光赫赫、千山萬山如火發、一輪頃刻上天衢、逐退羣星與殘月、斯似後改焉者、而反失氣象矣。

鄭谷詩云、愛僧不愛紫衣僧、此實然也、緇布衣之僧、猶有雅趣、紫朱彩衣、則其態非可好、李頎題璿公山池詩、清池皓月照禪心、伊藤東涯云、唐詩選註云、皓月一作白月、非也、若

作詩實的

あり、曰く、徹夜西風破扉を撼す、蕭條たる孤館一燈微なり、家山首を回らす三千里、目は斷ゆ天南雁の飛ぶ無し、此れ徹宗の作、金に敗らるるの時か、詩は則ち初唐の風調にして、餘感あるなり。

宋の陳郁の話腴に云ふ、太祖微なる時、日の詩に云ふ、出でむと欲して未だ出でず光辣熒、千山萬山火の發するが如し、須臾に走つて天上に向つて來り、殘星を趕卻し月を趕卻す、此詩風調は則ち尙ぶべきに非るも、氣象は則ち既に四海を吞まむと欲するの兆あり、宋の西郊野叟詩話に、亦之れを記して云ふ、太陽初めて出で、光赫赫、千山萬山火の發するが如し、一輪頃刻に天衢に上り、羣星と殘月とを逐退す、後に改めし者に似たり、而して反りて氣象を失へり。

鄭谷の詩に云ふ、僧を愛して紫衣の僧を愛せずと、此れ實に然るなり、緇布衣の僧は、猶雅趣有るも、紫朱彩衣は、則ち其の態、好すべきに非ず。

李頎の璿公の山池に題する詩に、清池の皓月禪心を照す、伊藤東涯云ふ、唐詩選の注に云ふ、皓月は、一に白月に

白月、則無所本此說誤矣、本詩作「白月爲是、唐人遊寺寄僧詩、多使「白月」字、此用佛氏黑月、白月之事、做詩料、是也、然黑月、白月、以爲佛氏之事、則東涯未之得歟、天竺固望前爲白月、望後爲黑月也。

古樂府、陌上桑詩云、日出東南隅、照彼秦氏樓、而次言「采桑事」、日出東南隅、則仲冬之日、采桑則春來三四月之節、古人亦有此杜撰、不思也夫。

都穆曰、東坡詩云、無事此靜坐、一日如兩日、若活七十年、便是百四十、唐子西詩云、山靜似太古、日長如小年、坡以「一日當兩日」、子西直以「日當年」、今云、子西之詩、則可謂詩矣、坡之詩、則誹謔理窟、是今世所謂宋風者、而非

三〇
作るは非なり、白月の若きは、則ち本づく所無しと、此の説誤れり、本と詩、白月に作るを是と爲す、唐人の寺に遊び僧に寄する詩、多く白月の字を使ふ、此れ佛氏の黒月、白月の事を用ひて詩料と做すとはなり、然れども、黒月、白月、以て佛氏の事と爲すは、則ち東涯未だ之れを得ざる歟、天竺固より望前を白月と爲し、望後を黒月と爲すなり。

古樂府の陌上桑の詩に云ふ、日東南の隅に出でて、彼秦氏の樓を照すと、而して次に采桑の事を言ふ、日東南の隅より出づるは、則ち仲冬の日、采桑は則ち春來三四月の節、古人も亦此の杜撰あり、思はざるかな。

都穆曰く、東坡の詩に云ふ、無事此に靜坐す、一日兩日の如し、若し七十年を活かば、便是れ百四十、唐子西の詩に云ふ、山靜にして太古に似たり、日長くして小年の如し、坡は、一日を以て兩日に當つ、子西は直に日を以て年に當つと、今云ふ、子西の詩は、則ち詩と謂ふべし、坡の詩は、則ち誹謔理窟、是れ今世の謂はゆる宋風なる者にして、而して詩たる所以に非ざるなり。

所以爲詩也。

李白詩云、我醉欲眠卿且去、明朝有意抱琴來、是全用淵明之言、淵明有客至者、設酒先自醉、更語客、我醉欲眠卿且去、白之於詩如全用衛萬二句、於當世詩、猶善許之、況古人之詞乎。

予幼而初學作詩、先人語曰、夜深童子喚不起、猛虎一聲山月高、詩調欲如是矣、夙覺此句高調、而記聽之、然未問其何人句、晚讀琅邪代醉編、是宋愈紫芝、字秀老之句、而王荆公尤賞之、見於石林詩話云、今之好宋風者、不好如是佳調、而嗜宋人臭氣、皆不得詩之所以爲詩也。

詩文用其方言、而不可解者、古今不鮮也、詩

作詩實的

李白的詩に云ふ、我は酔うて眠らむと欲す卿且つ去れ、明朝意行らば琴を抱いて來れと、是れ全く淵明の言を用ふ、淵明、客至る者有れば酒を設けて先づ自ら酔ひ、更に客に語るに、我は酔ひて眠らむと欲す卿且つ去れと、白の詩に於ける、全く衛萬の二句を用ゐるが如く、當世の詩に於て、猶善く之れを許す、況や古人の詞をや。

予幼にして而して初めて詩を作るを學ぶ、先人語けて曰く、夜深うして童子喚べども起きず、猛虎一聲山月高し、詩調は是の如きを欲すと、夙に此の句の高調を覺りて、而して之れを記憶す、然れども、未だ其の何人の句なるを問はざりき、晚に琅邪代醉編を讀むに、是れ宋の愈紫芝、字は秀老の句にして、而して王荆公尤も之れを賞すと、石林詩話に見ゆと云ふ、今の宋風を好む者、是の如きの佳調を好まずして、而して宋人の臭氣を嗜むは、皆詩の詩たる所以を得ざるなり。

詩文に其の方言を用ひて、而して解すべからざる者、古

毛傳云、厥鼈也、東坡嶺南詩云、稻涼初吠蛤、如此之類、使後人惑者也、齊魯俗、謂厥爲鼈、嶺南呼蝦蟇爲蛤云。

陸放翁云、有神降於鄭澤家、吟詩曰、忽然湖上片雲飛、不覺舟中雨濕衣、折得蓮花渾忘卻、空將荷葉蓋頭歸、此詩晚唐興象、其以爲鬼神之吟者、寓言耳、蓋是放翁自作。

林和靖詩、疎影橫斜水清淺、暗香浮動月黃昏、宋人皆賞此詩、但月黃昏不審、孔天瑞詩話云、月已西下、色黃而更昏、蔣津葦航紀談引之云、以此知黃昏夜深也、今謂月黃昏、雖有後人說焉、於唐以上、未得其徵、作者不可容易用之也。

杜子美詩、玉帳分弓射虜營、又送嚴公入朝

今群からざるなり、詩の毛傳に云ふ、厥は鼈なり、東坡の嶺南の詩に云ふ、稻涼して初めて蛤吠ゆ、と、此の如きの類、後人をして惑はしむる者なり、齊魯の俗、厥を謂ひて鼈と爲し、嶺南蝦蟇を呼びて蛤と爲すと云ふ。

陸放翁云ふ、神有りて鄭澤の家に降り、詩を吟じて曰く、「忽然湖上片雲飛び、覺えず舟中雨衣を濕す、折り得たる蓮花渾て忘卻し、空しく荷葉を將て頭を蓋うて歸る」と、此詩、晚唐の興象、其の以て鬼神の吟と爲すは、寓言のみ、蓋し是れ放翁の自作ならむ。

林和靖の詩に「疎影橫斜水清淺、暗香浮動月黃昏」宋人皆此の詩を賞す、但だ月黃昏、審ならず、孔天瑞の詩話に云ふ、月已に西に下り、色黃にして而して昏しと、蔣津の葦航紀談に之れを引きて云ふ、此を以て黃昏は夜の深しといふことを知るなりと、今謂ふ、月黃昏は、後人の説有り、と雖へども、唐以上に於て、未だ其の徵を得ず、作者容易に之れを用ふべからざるなり。

杜子美の詩に「玉帳弓を分つて虜營を射る、又嚴公の入

詩空留玉帳術、愁殺錦城人、又送盧侍御詩、但促銅壺箭、休添玉帳旂、宋張溟雲谷雜記云、王洙注云、玉帳兵書也、後來增釋者、不過曰、唐藝文志有玉帳經一卷而已、按顏之推賦云、守金城之湯池、轉絳宮之玉帳、又袁卓賦云、或王直使之遊宮、或居貴神之玉帳、蓋玉帳乃兵家厭勝之方位、謂主將於其方置軍帳、則堅不可犯、今謂此皆未審其據也、抱朴子外篇云、在大乙玉帳之中、不可攻也、後人謂將軍曰玉帳、蓋原乎此焉歟。

王維詩、白眼看他世上人、我方讀之者、他字屬世上人、龔門人岩名伯庸云、看他二字成語也、予未直以爲然矣、後讀甲乙剩言者、明柳陳父詩云、看他何處不換人、然則看他二

作詩實的

朝を送る詩に、空しく玉帳の術を留めて、愁殺す錦城の人、又盧侍御を送る詩に、但だ銅壺箭を促して、玉帳の旂を添ふることを休めよ、宋の張溟の雲谷雜記に云ふ、王洙の注に云ふ、玉帳は兵書なり、後來増釋する者、唐の藝文志に、玉帳經一卷ありと曰ふに過ぎざるのみ、按ずるに、顔子推の賦に云ふ、金城の湯池を守り、絳宮の玉帳を轉ず、袁卓の賦に云ふ、或は直使之遊宮に倚り、或は貴神の玉帳に居ると、蓋し玉帳は、乃ち兵家厭勝の方位にして、主將其の方に於て軍帳を置かば、則ち堅くして犯すべからざるを謂ふと、今謂ふ、此れ皆未だ其の據を審にせざるなり、抱朴子外篇に云ふ、太乙玉帳の中に在れば、攻むべからざるなりと、後人將軍を謂ひて玉帳と曰ふは、蓋し此に原くか。

王維の詩に、白眼看他世上の人、我が方之れを讀む者、他の字を世上の人に屬す、龔に門人岩名伯庸云、看他は二字の成語なりと、予未だ直に以て然りと爲さず、後に、甲乙剩言といふ者を讀むに、明の柳陳父の詩に云ふ、看他す何の處か人を換しめさらむと、然らば則ち看他の、

字、以爲成語也。

駱賓王靈隱寺詩、唐孟啓本事詩、以爲宋之問詩、曰宋考功以事貶黜、至江南遊靈隱寺、夜月極明、長廊吟行、且爲詩曰、驚嶺鬱岩曉、龍宮隱寂寥、第二聯搜奇思、終不如意、有老僧點長明燈、坐大禪牀、曰少年夜久不寐、而吟諷甚苦、何邪之問、答曰、弟子業詩、適欲題此寺、而興思不屬、僧曰、試吟上聯、卽吟之、僧再三吟諷、因曰、何不云樓觀滄海日、門聽浙江潮、之間愕然訝其遺歷、又續終篇、曰、桂子月中落、天香雲外飄、云云、僧所贈句、乃爲一篇之警策、遲明更訪之、則不復見矣、寺僧有知者曰、此駱賓王也、賓王當敬業之敗、而亦落髮、徧遊名山、至靈隱寺、以周歲卒、今日此

二字、以て成語たるなり。

駱賓王之靈隱寺の詩を、唐の孟啓の本事に、以て宋之間の詩と爲して曰く、宋考功、事を以て貶黜せられて江南に至り、靈隱寺に遊ぶ、夜月極めて明か、長廊に吟行し、且つ詩を爲りて曰く、驚嶺鬱として皆曉、龍宮隱として寂寥、第二聯、奇思を搜りて、終に意の如くならず、老僧の長明燈を點し、大禪牀に坐するあり、曰く、少年夜久うして寐ねず、而して吟諷甚だ苦しむは何ぞや、之間、答へて曰く、弟子詩を業とす、適に此の寺に題せむと欲し、而して興思屬せず、僧曰く、試に上聯を吟せよ、卽ち之れを吟す、僧再三吟諷し、因りて曰く、何ぞ樓には滄海の日を觀、門には浙江の潮を聽くと云はざる、之間、愕然として其の遺歷を訝り、又續きて篇を終へて曰く、桂子月中より落ち、天香雲外に飄る、云云、僧の贈る所の句、乃ち一篇の警策たり、明を遲ちて更に之れを訪へば、則ち復見えず、寺僧に知る者ありて曰く、此れ駱賓王なりと、賓王、敬業の敗に當りて、亦落髮して徧く名山に遊び、靈隱寺に至り、以て周歲にして卒すと、今日く、此の詩、唯だ三四二句を以て、何ぞ駱賓王之作と爲すや、太だ疑ふべきなり、今、

詩唯以三四二句、何爲駱賓王作、太可疑也、
今唐詩選、隱作、鎖、聽作對、

張祐號夫人詩、楊太真外傳、以爲杜甫詩、曰、
封大姨爲韓國夫人、三姨爲虢國夫人、八姨
爲秦國夫人、同日拜命、皆月給錢十萬、爲脂
粉之資、然虢國不施粧粉、自銜美艷、常素面
朝天、當時杜甫詩云、虢國夫人承主恩、平明
上馬入宮門、卻嫌脂粉澆顏色、淡拂蛾眉朝
至尊、得此傳、而詩意初白也、今唐詩選、上作
騎澆作汚、娥作蛾、其以爲張祐詩者何也、

太平廣記載、眞娘者、吳國之佳人也、死葬吳
宮之側、行客感其華麗、競爲詩題於墓樹、有
舉子譚銖者、吳門之秀士也、因書一絕、後之
來者、視其題處、稍息筆、矣、詩曰、武邱山下塚

作詩賞的

唐詩選に、隱は鎖に作り、聽は對に作れり、

張祐の虢夫人の詩は、楊太真外傳に、以て杜甫の詩と爲す、曰く、大姨に封して韓國夫人と爲し、三姨を虢國夫人と爲し、八姨を秦國夫人と爲す、同日拜命せられ、皆月に錢十萬を給して、脂粉の資と爲す、然れども、虢國、粧粉を施さず、自ら美艷を銜ひ、常に素面天に朝す、當時杜甫の詩に云ふ、虢國夫人主恩を承け、平明馬に上つて宮門に入る、卻つて嫌ふ脂粉の顏色を澆すを、淡く蛾眉を拂うて至尊に朝すと、此の傳を得て、而して詩意初めて白くなり、今唐詩選に、上は騎に作り、澆は汚に作り、娥は蛾に作る、其の以て張祐の詩と爲すは何ぞや、

太平廣記に載す、眞娘は、吳國の佳人なり、死して吳宮の側に葬る、行客其の華麗に感じ、競ひて詩を爲りて墓樹に題す、舉子譚銖といふ者あり、吳門の秀士なり、因りて一絶を書す、後の來者其の題する處を視て、稍や筆を息む、詩に曰く、武邱山下塚、棠棠松栢蕭條盡く、悲むべし、何

繁纒、松柏蕭條盡可悲、何事世人偏重色、眞娘墓上獨題詩、予謂詩則佳也、然意則未也、何者、凡特有名者、後人追感之、以入乎詩焉、不獨重色、雖墳墓纒纒也、其與土木朽、而無名者、非可復使行客感焉、明楊循別記云、采石江頭李太白墓在焉、往來詩人、題詠殆遍、有客書一絕云、采石江邊一抔土、李白詩名耀千古、來的去約寫兩行、魯般門前掉大斧、斯亦可以察焉。

韓退之詩、喚起窻全曙、催歸日未西、無心花裏鳥、更與盡情啼、全唐詩話云、乃二禽名也、喚起偏鳴於春曉、江南謂之春喚、催歸子規也。

韓退之貶潮州刺史、次藍關、示姪孫湘詩、一

事ぞ世人偏に色を重んじ、眞娘墓上獨詩を題す、予謂ふ、詩は則ち佳なり、然れども、意は則ち未だし、何となれば、凡そ特に名有る者は、後人之れを追感し、以て詩に入る、獨色を重んずるにあらず、墳墓纒纒と雖へども、其の土木と與に朽ちて、而して名無き者は、復行客をして感ぜしむべきに非ざるなり、明の楊循の別記に云ふ、采石江頭に李太白の墓在り、往來の詩人、題詠殆んど遍し、客有り一絶を書して云ふ、采石江邊一抔の土、李白の詩名千古に耀く、來的去的兩行を寫す、魯般門前に大斧を掉ふ、斯れ亦以て察すべし。

韓退之の詩に、喚起窻全く曙け、催歸日未だ西せず、無心花裏の鳥、更に與に情を盡して啼く、全唐詩話に云ふ、乃ち二禽の名なり、喚起偏に春曉に鳴く、江南にて之れを春喚と謂ふ、催歸は子規なり。

韓退之潮州の刺史に貶せられ、藍關に次し、姪孫湘に示

封朝奏九重天、夕貶潮陽路八千、欲爲聖明除弊事、豈將衰朽計殘年、雲橫秦嶺家何在、雪擁藍關馬不前、知汝遠來應有意、好收吾骨瘴江邊、此詩詞情格調與臻矣、使人感慨焉者也、于鱗何不選取焉。

宋惠洪冷齋夜話云、白樂天每作詩、令一老嫗解之、問曰、解否、嫗曰、解則錄之、不解則易之、故唐末之詩、近于鄙俚、晚唐之下調、准而可知也。

我方作詩、創於大友、大津二皇子、大友皇子、侍宴詩云、皇明光日月、帝德載天地、三才竝泰昌、萬國表臣義、又述懷詩云、道德承天訓、鹽梅寄眞宰、羞無鹽撫術、安能臨四海、此二首、其志操可尙也、大津皇子、遊獵詩云、朝擇

作詩質的

す詩に、一封朝に奏す九重の天、夕に潮陽に貶せられて路八千、聖明の爲に弊事を除かむと欲す、豈に衰朽を將て殘年を計らむや、雲は秦嶺に横つて家何にか在る、雪は藍關を擁して馬前まず、知る汝遠來應に煮有るべし、好し吾が骨を收めよ瘴江の邊に、此の詩詞情格調與に臻れり、人をして感慨せしむる者なり、于鱗何ぞ採取せざる。

宋の惠洪の冷齋夜話に云ふ、白樂天詩を作る毎に、一老嫗をして之れを解せしむ、問ひて曰く、解するや否や、嫗解せりと曰はば則ち之れを錄す、解せざれば則ち之れを易ふ、故に唐末の詩鄙俚に近しと、晚唐の下調、准じて知るべきなり。

我が方詩を作ること、大友、大津の二皇子に創る、大友皇子の侍宴の詩に云ふ、皇明日月に光り、帝德天地に載ち、三歳竝に泰昌、萬國臣義を表す、又、述懷の詩に云ふ、道德天訓を承け、鹽梅眞宰に寄す、羞づらくは鹽梅の術無きを、安ぞ能く四海に臨まむ、此の二首、其の志操尙ぶべきなり、大津皇子の遊獵の詩に云ふ、朝に三能士を擇び、暮に萬騎の筵を開く、鬪を喫して俱に給なり、蓋を傾けて

三能士、暮開萬騎筵、喫樹俱豁矣、傾盡共陶然、月弓暉谷裡、雲旌張嶺前、曠光已隱山、壯士且留連、此亦氣象可尙也、大友、天智帝之子、大津、天武帝之子、時當唐高宗世、而專學初唐者也。

嵯峨帝幸河陽館、題一聯句曰、開閣唯聞朝暮鼓、登樓遙望往來船、以示小野篁曰、此句如何、篁少沈吟曰、聖作實佳、但願遙見、改空可也、歎帝愕然曰、此句卿素知之耶、對曰不知、帝曰、是白居易之句也、本集作空、今朕換遙、以戲試卿耳、此時白氏文集、初傳于茲、而秘於御府、外人未得之見矣、篁之精於詩、非今人之所及也。

橘直幹遊石山寺詩云、蒼波路遠雲千里、白

共に陶然、月弓谷裡に暉き、雲旌嶺前に張る、曠光已に山に隠れ、壯士且つ留連す、此れ亦氣象尙ぶべきなり、大友は、天智帝の子、大津は、天武帝の子、時に唐の高宗の世に當りて、而して専ら初唐を學ぶ者なり。

嵯峨帝、河陽館に幸し、一聯句を題して曰く、閣を開いて唯だ聞く朝暮の鼓、樓に登つて遙に望む往來の船と、以て小野篁に示して曰く、此の句如何んと、篁少らく沈吟して曰く、聖作實に佳なり、但だ願くは遙を空に改めらるれば可ならむか、帝愕然として曰く、此の句、卿素と之れを知れりや、對へて曰く、知らず、帝曰く、是れ白居易の句なり、本集に空に作る、今朕遙に換へて以て戲に卿を試るのみと、此の時、白氏文集、初めて茲に傳はりて、而して御府に秘せり、外人未だ之れを見ることを得ず、篁の詩に精なる、今人の及ぶ所に非ざるなり。

橘直幹の石山寺に遊ぶ詩に云く、蒼波路遠し雲千里、白

露山深鳥一聲、圓融帝時、僧奮然入、宋於詩人交會、席以爲己、句雲爲霞、鳥爲蟲、以示彼詩人、其人曰、佳句也、但霞爲雲、蟲爲鳥、則愈佳也、所謂詩人不知爲誰乎、其宋人之於詩、其精鍊亦可知也。

弘仁帝幸齋院、花宴使文人賦、春日山莊詩、各探韻、嵯峨帝第三皇女、有智內親王、探得塘光行蒼、卽賦曰、寂寂幽莊、迷樹裏、仙輿一降、一池塘、棲林孤鳥、識春澤、隱澗寒花、見日光、泉聲近報新雷響、山色高晴、舊雨行、從此更知恩願渥、生涯何以答、蒼蒼皇女時、年十七云、此詩風調趣向、文墨之士、將不及焉、但惜行字誤韻。

村上帝時、源英明、夏日詩、池冷水無三伏夏、

作詩實の

露山深し鳥一聲、圓融帝の時、僧奮然宋に入り、詩人交會の席に於て、以て己の句と爲し、雲を霞に爲り、鳥を蟲に爲り、以て彼の詩人に示す、其の人曰く、佳句なり、但霞を雲に爲り、蟲を鳥に爲らば、則ち愈佳ならむと、謂ゆる詩人とは、誰たるを知らず、其の宋人の詩に於ける、其の精鍊亦知るべきなり。

弘仁帝、齋院の花宴に幸し、文人をして、春日山莊の詩を賦せしむ、各韻を探る、嵯峨帝の第三の皇女、有智内親王、塘光行蒼を探り得、卽ち賦して曰く、寂寂たる幽莊樹裏に迷ひ、仙輿一たび降る、一池の塘、林に棲む孤鳥、春澤を識り、澗に隱る、寒花日光を見る、泉聲近く報す新雷の響、山色高く晴れて舊雨行る、此れ従り更に知る、恩願の渥きことを、生涯何を以て答蒼蒼に答へむ、皇女時に年十七と云ふ、此の詩、風調趣向、文墨の士も、將に及ばざらむとす、但だ惜むらくは行の字、韻を誤るを。

村上帝の時、源英明の夏日の詩に、池は冷かにして水に

松高風有一聲秋、菅原文時、在側曰、宜以池爲水、水爲池、以松爲風、風爲松、此菅博士之是正實得焉、水冷池無三伏夏、風高松有一聲秋、最爲佳句也、作者所以宜著意也。

龜山帝、達磨忌御製、江浪激奔嵩雪寒、栖栖南北不亦閑、當時若得親相見、不在魏梁庸主間、此御製實天子之氣象、恨如寒字何。

藤原周光、夏日遊林亭詩、養性自然消俗慮、逃名何必卜山居、醉中取次雖飛盡、老後等閑未廢書、世路險難爭謝遣、生涯蹇剝欲何如、此詩八句四聯、皆今時作者所不及也。

民黑人、獨坐山中詩、煙霧辭塵俗、山川壯我居、此時能莫賦、風月自輕余、此一絕、風趣最可好、我方中古縉紳之徒、其善詩者、猶不可

三伏の夏無く、松高うして風に一聲の秋有り、菅原文時、側に在りて曰く、宜しく池を以て水と爲し、水を池と爲し、松を以て風と爲し、風を松と爲すべしと、此の菅博士の是正實に得たり、水冷にして池に三伏の夏無く、風高うして松に一聲の秋有り、最も佳句たるなり、作者以て宜しく意を着くべき所なり。

龜山帝の達磨忌の御製に、江浪激奔して嵩雪寒し、南北に栖々して亦閑ならず、當時若し親しく相見るを得ば、魏梁庸主の間に在らず、此の御製實に天子の氣象なり、恨むらくは寒の字を如何む。

藤原周光の夏日林亭に遊ぶ詩に、性を養うて自然に俗慮を消し、名を逃れて何ぞ必ずしも山居を卜せむ、醉中取次に盡を飛ばすと雖へども、老後等閑未だ書を廢せず、世路の險難争か謝遣せむ、生涯の蹇剝何如せむと欲す、此の詩、八句四聯、皆今時の作者の及ばざる所なり。

民黑人、獨坐山中の詩に、煙霧塵俗を辭し、山川我が居を壯にす、此時能く賦すること莫ければ、風月自ら余を輕ぜむ、此の一絶、風趣最も好すべし、我が方中古縉紳の徒、其の詩を善する者、猶枚擧すべからざるなり。

枚擧也。

甲侯信玄、少壯好作詩、其新年詩云、淑氣未融春尚遲、霜辛雪苦豈言詩、此情愧破春風笑、吟斷江南梅一枝、薔薇詩云、滿院薔薇香露新、雨餘紅色別留春、風流謝傅今猶在、花似東山縹緲人、又便面有雁詩云、水綠山青欲雨初、數行鴻雁度長虛、天涯高處要通信、定可蘇卿胡地書、越侯謙信、征能州時詩云、露下軍營秋氣清、數行鴻雁月三更、越山并得能州景、不管家鄉事遠征、與侯正宗、馬上少年過詩云、二十年前少壯時、高名富貴亦私期、由來不識干戈事、唯把春風桃李扨、斯皆佳調、我方戰國諸侯、其有如斯雅趣者、亦猶不寡也。

作詩賢的

甲侯信玄、少壯にして好みて詩を作る、其の新年の詩に云ふ、淑氣未だ融せず春尚遲し、霜辛雪苦豈に詩を言はむや、此の情愧づらくは春風に笑はれむ吟斷す江南の梅一枝、薔薇の詩に云ふ、滿院の薔薇香露新なり、雨餘の紅色別に春を留む、風流の謝傅今猶在らば、花は東山縹緲の人に似む、又便面に雁有るの詩に云ふ、水綠に山青うして雨ふらむと欲するの初、數行の鴻雁長虛を度る、天涯高き處通信を要す、定めて蘇卿胡地の書なる可し、越侯謙信、能州を征する時の詩に云ふ、露下つて軍營秋氣清し、數行の鴻雁月三更、越山並得す能州の景、家郷に管せず遠征を事とす、與侯正宗の馬上に少年過ぐの詩に、二十年前少壯の時、高名富貴亦私に期す、由來干戈の事を識らず、唯だ把る春風桃李の扨と、斯れ皆佳調、我が方戰國諸侯、其の斯の如き雅趣有る者、亦猶寡からざるなり。

1

作詩質的終

作詩質的跋

春來數月、心神鬱結、陶然不伸、頃日蒙先生遙賜手書、以見示斯一冊、乃西嚮拜跪、熟察其所指揮、體裁聲調、舉莫不典雅、正堂堂、殆令人有雲霄之思、三復讀卒、曾襟初釋然、所謂不覺沈疴之去、體者也歟、近世詩家、或稱好宋元體、乃強設區區工夫、欲以摸其形容、新言奇辭、徒飾之務、彫鏤稍成、則意脈既喪、試置之齒牙、鄙俚酸薄、固不可玩味也、而偶有言唐詩者、反以譏嘲譬之、猶忘己之兔缺、而反嗤人之口輔也、若一向明鏡、自鑒、寧不悔前日之非耶、此之一冊、實近世詩家之明鏡、人人自鑒而可也。

文政四年辛巳夏五月

千葉要謹識

大正九年一月二十日印刷
大正九年一月廿三日發行

日本特許叢書 第一卷

非賣品

編輯者

池田四郎次



發行者

立田義元

印刷者

高木鳥三

印刷所

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
株式會社 秀英會第一工場



發行所

東京市神田區
小川町一番地

文會堂書店

電話神田三二一六番
接發東京三五一三番